



まぐれ読書メモ  
星新一  
有楽出版社  
(6/25刊・¥980)

コジンスキーから向田直幹までの、一六五冊(と三冊)が取り上げられている。「奇想天外」誌に約二年間、十三回にわたって連載された内容である(この前に連載されていたのが、筒井康隆「みだれうち漬書ノート」)。「書評でも新刊紹介でもない。メモ的エッセー」といったところだ」と言うだけあって、あらゆる本に対する感想が、著者の興味の対象に従い、淀みなく流れている。タイムリーな話題作にまじって、ちょっと古い本や、限定本なども入る。ある時女流作家に興味を向け、河野多恵子から中沢けいまで、女性の本ばかり七冊を並べたり、書評の間に、時々、例えば旅行記を載せたりする。分量や冊数が各回によって違っていて、文字通りのメモ的エッセイ風。けれども、それは著者の個人メモとは、少し違うのだ。各々のパートが、一つの読み物として完結している。これだけさまざまな種類の本がありながら、なお一貫したオムニバス風(とでもいえる形)にまとまっている点が、本書の面白さなのである。そして、書き終えた後、改めて各々の本に対する、著者の意見を確かめてみれば、書評として創れるものも多いのだ。